

広島大学 大学教育研究センター  
大学論集 第10集(1981); 101-123

# ドイツ語圏における大学の階層構造 と学者の移動

—— 18世紀末以降の医学の場合 ——

山 崎 博 敏

## 目 次

1. 学者の移動分析の視点と方法
2. ドイツ語圏における学者の移動
3. ドイツ語圏における大学の階層構造
4. まとめと今後の課題

# ドイツ語圏における大学の階層構造 と学者の移動

— 18世紀末以降の医学の場合 —

山崎博敏\*

長い期間に及ぶドイツの領邦国家の割拠状況は各領邦国家の競争と勢力均衡の中で地方分権的の大学制度を生みだし、領邦国家間の競合ないし競争は各領邦の威信の象徴としての大学の競争をもたらした。この競争的なドイツの大学制度は個々の大学の制度・待遇の改善、優秀な教師の引き抜き合戦、よりよき地位と待遇の改善を求める各研究者個人の競争と頻繁な移動、よりよき教師を求める学生の移動、革新の急速な拡散、イギリスやフランスに比べれば比較的平坦な大学の威信構造などによって特徴づけられるとされている。<sup>1)</sup> 中世大学の伝統を受けついでいるドイツの大学は、学者が就職する大学を選択する自由が維持されており、学者は広範な地域の大学を移動したのである。だが、プロイセン国家の勢力増大、ドイツの統一、その後のワイマール共和国、ナチス、第二次大戦での敗北と続く政治上の変化、および学問研究の大規模経営化に伴う国家の大学への関与増大は大学自体にも全体の大学制度にも少なからず影響を与え、従来の性格は数多くの面で変化した。

本稿はさまざまな近代のドイツの大学制度の特徴のうち、学者の大学移動と大学の階層構造に焦点をあて、18世紀末より現代(1969年)までの期間における医学を例にして実証的なデータを基に考察し、ドイツのアカデミック・コミュニティの構造の一端を明らかにすることを目的とする。

## 1. 学者の移動分析の視点と方法

ドイツの文化的活動の及ぶ範囲は、中央ヨーロッパの主要部一面に拡がって常にドイツの州の境界をも越えていた。<sup>2)</sup> また19世紀半ば以降、世界の学問のセンターとしてのドイツには世界各国から学者、留学生が集まり、周辺諸国からの頭脳流入はドイツ学問の隆盛のもう一つの理由と考えられる。<sup>3)</sup> 従って、ドイツの大学における学者の移動を考察する場合、単にドイツ一国のみならず、オーストリア、スイス、ポーランドなど周辺諸国をも視野に入れなければならない。

以上のような問題にこたえるだけの近代ドイツの大学教員の経歴や移動状況に関する個人データはごく少ないが、医学については例外的にハンス・ハイント・オイルナーが18世紀末から1969年までの200年近い期間にわたるドイツ語圏主要35大学の正教授クラスの個人データを公にしている。<sup>4)</sup> これはドイツ語圏(現在の東西ドイツ、オーストリア、スイス、チェコスロバキア、部分的にポーランド(ブレスラウ)、フランス(ストラスブルグ))の35の大学<sup>5)</sup>の医学部の専門代表者(原則として正教

\* 大学教育研究センター助手

授。講座成立以前には員外教授や私講師なども含む。)のべ約4,200人一人ひとりの就任年,退任年,名前,生没年,退任の内容(死亡,退職,転出した場合はその大学名など)を判明した限りにおいて一覧表にしたものである。本論ではこのデータを用いて医学についての事例研究を行なうことにする。

次に本論における学者の大学移動分析の視点をのべる。最初に,一人ひとりの学者がどの大学からどの大学に移動したか,即ち大学間移動を分析する。その際200年に近い期間を5つに区分し,時系列的に移動パターンの変化を考察してゆく。

第二に学者の移動の頻度の分析を行なう。ドイツの大学では学者の移動はどの程度であったか。競争的学術制度のもとではかなり頻繁であるようにも思えるが,これを時系列的にそして大学別に分析する。これは学者一人あたり一つの大学に何年在任したか,という学者一人一大学平均在任期間を計算することによって測定する。また移動頻度は地位別に異なっているであろうと予想される。国家官吏として安定した地位にある正教授とそうでない者とは一つの大学に在任する期間に差があるであろうからである。そこで,一大学あたり平均在任期間を地位別に比較することにする。

第三に考察の対象にするのは大学の階層構造である。大学の威信と学者の大学間移動は相互に関連があるので,移動のデータからドイツ諸圏の大学の威信を測定することを試み,階層構造の実態とその歴史的变化を明らかにしたい。

資料の処理は次のような手順で行なった。まずオイルナーのデータに掲載されている学者全員について専攻下位分野<sup>6)</sup>,就任年,退任年,移動の内容,所属大学をコンピュータにファイルし,これから移動前の大学と移動後の転出大学の35×35のマトリクスを時代別に作成した(これを移動マトリクスと呼ぶことにする)。つまり,移動マトリクスの一つのます目はある期間内にA大学からB大学に何人転出したかを示している。移動マトリクスは本論文の最後に附した。この移動マトリクスから各時期ごとに教員の移動パターンを図示する。先に述べた三つの課題のうち,第一と第三の課題は主として移動マトリクスをもとにして分析する。

なお,オイルナーのデータは正教授を中心とするものであり,特に19世紀後半においてはそれが著しい。これはそのころから各医学下位学科に正教授職が設置され,医学研究の制度化が急速になされたためである。このため移動マトリクスの作成,移動パターンの図示をはじめ主要な議論は正教授<sup>7)</sup>を中心に行なう。

学者の移動パターンの変化を分析してゆく場合,どのように時代区分するかは重要な問題である。ほかにも区分できるかもしれないが,ここでは1810年のベルリン大学の設立,1871年のドイツ統一(翌年ストラスブルグ大学設立),1918年の第一次大戦の敗北とワイマール共和国成立,1948年の東西ドイツ分裂をメルクマールにして次のように時代区分する。第一期(～1809),第二期(1810～1871),第三期(1872～1918),第四期(1919～1948),第五期(1949～1969)。

## 2. ドイツ語圏における学者の移動

### 移動パターン

**第一期（～1809）** ベルリン大学設立以前にはエルランゲン、フライブルク、ギーセン、ゲッチングン、グライフスバルト、ハレ、ハイデルベルク、イエナ、キール、ケーニヒスベルグ、ライプチヒ、マールブルク、ロストック、チュービンゲン、ヴェルツブルク、バーゼル、ウィーン、プラハの18大学の医学部の学者がオイルナーのリストに記載されている。リストに最初に記載されるのは1776年にケーニヒスベルクの解剖学正教授を死亡して退任する者であるが、第一期では医学下位学科のうち解剖学、外科学など少数のものしか大学に制度化されておらず、またオイルナーのリストも未整備で氏名、生没年、在任期間、退任の内容など判明していない項目が多いため、この期間の移動事例も全体でわずかに10にも満たない。従って第一期のみ移動事例全てを図示する。図1が第一期の大学間移動パターンである。イエナからハレへ3人、ハイデルベルクへ2人、ゲッチングンへ1人正教授が移動している。そしてゲッチングンからマールブルクへ1人、ヴェルツブルクからイエナへ1人移動している。またオーストリアのウィーン大学へプラハ大学から1人の移動がある。このようにドイツではハレ大学は正教授の移動の最終到達大学になっている。またイエナとハレの両大学は3

人の移動事例が見られるように人事交流上関係深い。

**第二期（1810～1871）** ベルリン大学の医学部正教授は1810年から着任し始める。この時期はプロイセンが隣国オーストリアやフランスと競合しながら周辺の領邦国家を併合してドイツを統一する時期であるが、医学部の新設はボン(1819)、ブレスラウ(1811)、バイエルンのミュンヘン(1826)とドイツでは三月革命以前に集中している。スイス、オーストリアではやや遅れてチューリヒ(1833)、ベルン(1834)、グラーツ(1863)、インスブルック(1869)に医学部が設立される。医学の専門分化は19世紀半ばから急速に進行し、生理学、病理学、眼科、小児科などが各大学で競って制度化される。ドイツでこの時期に医学部の新設が少ないのは既存大学の拡大、新興諸講座の新設が相ついたのであろう。この時期はドイツ医学の黄金時代の開幕期で、ヨハネス・ミュラー、ヘルムホルツ、デュ・ボア・レイモン、ヴィルヒョーなど新興学問分野の革新者が出現する。

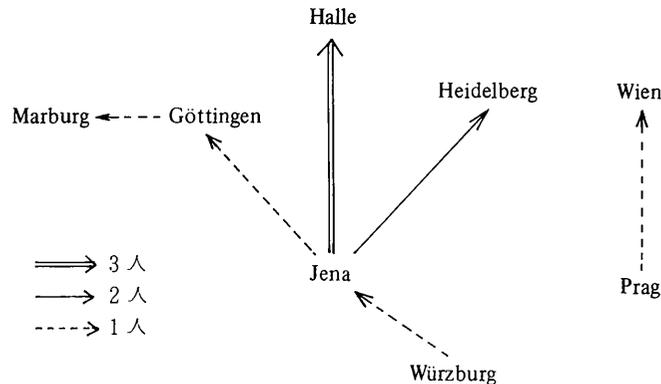


図1 正教授の大学間移動パターン（～1809）

大学医学部数と講座数が増加したため、この時代には学者数と移動数は飛躍的に増大する。図2は第二期の正教授の移動パターンである。ここに明らかなように、正教授の移動範囲はドイツとオーストリアの二大強国におおよそ二分され、さらにドイツには、ベルリン大学を最終到達地位とするグループと、西南ドイツやスイスの地理的に近いいくつかの大学からなる小さなグループがある。ベルリ

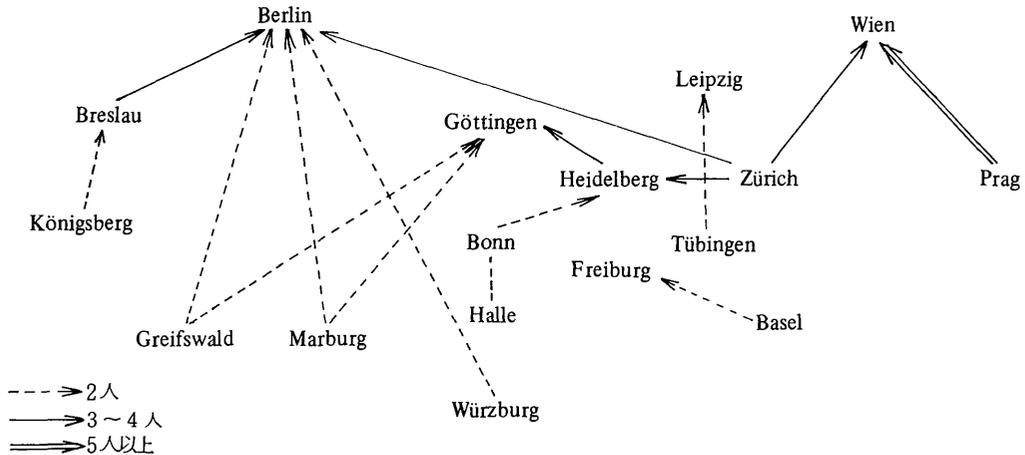


図2 正教授の大学間移動パターン（1810 - 1871）

ンとゲッチェンゲンは共にライプスバルトやマールブルクなどからの正教授の転入者が多いが、ベルリンはブレスラウ、ケーニスベルクなど東部の諸大学のほかにヴェルツブルグ、チューリヒなど全国から学者が移動して来ている。ゲッチェンゲンはハイデルベルクからの転入者も多い。一方オーストリアのウィーン大学へはプラハ大学から大量の正教授の転入があり、チューリヒからも3人の移動がある。ドイツ語圏南東部ではウィーン大学を中心にして国境を越えた一つの下位文化圏が形成されていたようである。

なお、チューリヒ大学からはウィーン、ベルリン、ハイデルベルクにそれぞれ3人の正教授が転出し、オーストリア、プロイセン、バーデンに対して均等の関係にある。チューリヒ大学はまたオーストリア、ドイツの2つのグループに対して関係をもっている数少ない大学であり、オーストリア、ドイツの二大大国のはざまに両者に関係をもち、両グループの結節点の位置にある。

次に以上をより詳細に考察する意味で地域間の移動状況をみてみよう。ドイツ語圏を北ドイツ、西南ドイツ、スイス、オーストリア、チェコ（プラハ大学）に5分類し、これらの地域間の移動状況を時系列的にみたのが表1である。分類カテゴリーは1866年の北ドイツ連邦結成時点における国境をもってし、ドイツについては北ドイツ連邦加盟諸邦の大学のグループと、これに加盟していないバーデン、ヴェルテンベルク、バイエルン、ヘッセン＝ダルムシュタットの西南ドイツ諸邦の大学グループに分けた<sup>8)</sup>。表1から明らかなように、オーストリアの諸大学への正教授転入者11名のうち9名はスイスの諸大学とプラハ大学の正教授である。そしてプラハ大学正教授7名の内6名はオーストリアの大学（特にウィーン大学）に転出しており、オーストリア、プラハ、スイスの諸大学は一つの集団をなし

ている。しかしながら、スイスの大学からはオーストリアだけでなく、北ドイツ、西南ドイツの各大学にも多数の正教授が転出しており、転出先はドイツ語圏全域にわたっている。先に述べたようにチューリヒ大学はその好例である。一方、北ドイツの諸大学には、西南ドイツ、スイスの各大学からも転入してくるが、逆に北ドイツの諸大学からの転出はせいぜい西南ドイツ止まりで、多くは北ドイツ地域内の大学を転々としている。西南ドイツの諸大学には北ドイツ、スイスの諸大学から多く転入し、ここから北ドイツを中心にスイスへも転出する者がいる。このように、ドイツ国内では北ドイツと西南ドイツの大学は全体として相互の人事交流は多い。

ここでスイスの諸大学

表1 正教授の地域間移動(1810-1871)

学の特徴を一つ指摘しておく。スイスの諸大学のこの期間において既に正教授になっている者の転入数は4名であるが、正教授の転出数は21名である。これ

From \ To	北ドイツ	西ドイツ	南ドイツ	スイス	オーストリア	プラハ
北ドイツ	32	12		0	1	1
西南ドイツ	16	7		2	1	1
スイス	6	9		2	3	1
オーストリア	0	0		0	0	0
プラハ	1	0		0	6	-

はスイスの諸大学が他大学の員外教授や助教授からの昇任の結果、正教授として招聘される最初の大学である場合が多いということを示している。つまりドイツ語圏の大学の正教授の遍歴はしばしばスイスの大学の正教授を振り出しにしてなされているのである。この意味でスイスの諸大学はドイツにおけるマールブルク、グライフスバルトなどと同じような位置にあるといえる。

**第三期(1872~1918)** このドイツ帝国時代は医学の専門分化と各下位専門学科の制度化が頂点に達した時代である。法医学、衛生学、薬理学、皮膚科、神経精神科、生理化学など多くの講座が新たに設置された。ドイツではこれらの新興分野にコッホ、ベーリング、エールリッヒなどの革新者が出現し、多くのノーベル賞受賞者を輩出した。医学部新設はフランスから割譲したアルザス＝ロートリンゲン地方のストラスブルグ大学(1872)のあと、デュッセルドルフ医大、ミュンスター大学、フランクフルト大学が20世紀にはいってから設立された。これらは主としてライン川沿岸地域の都市部に集中している。

統一後の正教授の移動には図2に明らかなように大きく3つのグループがある。第一のグループはプロイセンを中心とする北ドイツの大学グループである。ストラスブルグ大学(帝国直轄領)、ハレ、ゲッチンゲンなど有力大学の正教授が終着駅としてのベルリン大正教授に招聘され、ストラスブルグゲッチンゲンにはその穴うめにはケーニヒスベルグなどの正教授が招聘されている。第二のグループはバイエルンを中心とする西南ドイツの諸大学からなるもので、ミュンヘン大学を終着駅にしてヴェルツブルク、エルランゲン、マールブルクなどがこれに属する。この大学グループは第二期にはっきりとしたものではなく、第三期になってスイスの諸大学をも包括して形成されてきたものであるが、ヴェルツブルク、マールブルクなど第一グループの大学とも関係をもち、グループとしての凝集性は弱い。最後に第三のグループはプラハ大学とオーストリアの諸大学のグループであり、かなり閉鎖的で強固なものである。正教授の移動はほとんどこのグループ内でおきている。インスブルック大学を正

教授地位の出発点にしてグラーツ大学あるいはプラハ大学を經由してウィーン大学へと至るという移動ルートが明確にできており、これらの大学間の階層ははっきりしている。中欧で最古の歴史を誇る

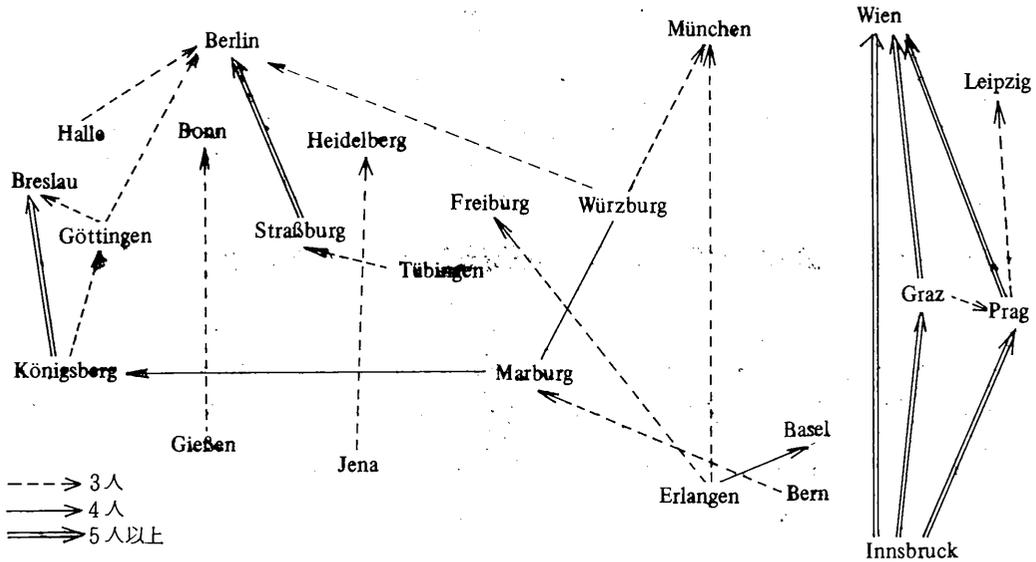


図3 正教授の大学間移動パターン（1872 - 1918）

プラハ大学はウィーン大学の勢力下にある。この期間にプラハ大学からライプチヒ大学へ3名の正教授が転出している。ライプチヒ大学は1476年にプラハ大学からドイツ系の学者が移住してできた、ヨーロッパ大学

表2 正教授の地域間移動（1872 - 1918）

From \ To	北ドイツ	西ドイツ	南ドイツ	スイス	オーストリア	プラハ
北ドイツ	136	38	3	8	1	
西南ドイツ	22	21	4	1	2	
スイス	23	7	1	0	2	
オーストリア	7	2	0	30	9	
プラハ	9	2	1	9	-	

史上最後の大学教師の移動によって創立された最後の大学であるが<sup>9)</sup>、このころも深い交渉をもっていた。この時期のもう一つの特徴は、スイスの大学とオーストリアの大学

の関係は希薄化し、ドイツの大学と結びつきが強くなっていることである（表2参照）。

**第四期（1919 - 1948）** 第一次世界大戦後の30年間はワイマール共和国、ナチス第三帝国、第二次世界大戦後の混乱と東西ドイツ分裂と政治的に変動の多い時期である。ナチス時代には多くの学者が国外に亡命あるいは追放され、第二次世界大戦直後にはチェコスロバキアやポーランドの社会主義化、領土再編成、東西ドイツ分裂を控えて大規模な学者の移動が起きている。この時期は特に政治的な原因による移動が多いのが特徴である。大学の開設はハンブルク（1919）、ケルン（1925）、マインツ（1948

再建)と大都市地域を中心になされている。

学者の移動状況は図4に示しているように、非常に広範な地域にわたっている。オーストリアの大学群は孤立した生態系をもっているが、ドイツ

国内ではベルリン大学とミュンヘン大学をドイツ各地の大学からの学者の転入の最終到達点として、ほぼ全ドイツ規模で学者の移動がおこなわれている。西南ドイツの大学と北ドイツの大学の間の境界は以前の時期よりも明瞭ではなくなったようである。

表3 正教授の地域間移動 (1919 - 1948)

From \ To	北ドイツ	西ドイツ	南ドイツ	スイス	オーストリア	プラハ
北ドイツ	245	77	6	5	0	
西南ドイツ	20	16	2	1	0	
スイス	2	3	3	0	0	
オーストリア	7	5	0	17	0	
プラハ	9	3	0	3	-	

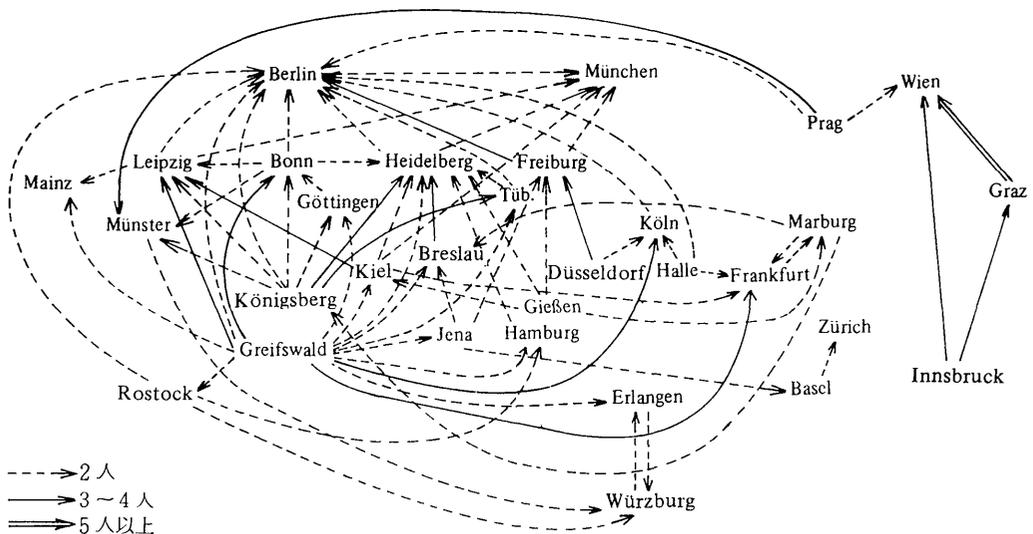


図4 正教授の大学間移動パターン (1919 - 1948)

第五期(1949 ~ 1969) 東西ドイツ分裂によりベルリン、グライフスバルト、ハレ、イエナ、ライプチヒ、ロストックの各大学は東ドイツに属することになり、西ベルリンにはベルリン自由大学が新設された。分裂後はしばらくの間、東ドイツから西ドイツへ大量の学者の移動がつづく。表4に明らかのように、1949年以後東ドイツの諸大学から23人ももの正教授が西ドイツの諸大学に移動した。最も多い転出大学は図5にあるように、新設のベルリン自由大学(4名全員がベルリン大学から)、ゲーセン大学などである。これは東ドイツの側からみれば大量の頭脳流出である。反対に周辺の国から東ドイツの大学に移動した者はいない。建国以後の東ドイツの医学部正教授のリワルートは国内の大学からなされることになる。なお、東ドイツの大学から転入した学者が多いベルリン自由大学からは、

さらにハイデルベルク、ハンブルグ、ミュンヘンなどに多くの学者が転出している。

スイス、オーストリアと西ドイツの人事交流も少なくなった。表4に示す通り、両国の大学には西ドイツの大学の正教授各2名が転出し、オーストリアから1名の正教授が西ドイツの大学（デュッセルドルフ大学）に転出しているが、相対的にみて以前より移動は少ない。スイス、オーストリア両国においては自国内の正教授の移動も減少しているがこれはあとで述べる正教授在任期間の長期化に関連がある。

表4 正教授の地域間移動（1949 - 1969）

From \ To	西ドイツ	東ドイツ	スイス	オーストリア
西ドイツ	77	0	2	2
東ドイツ	23	21	0	0
スイス	0	0	0	0
オーストリア	1	0	0	3

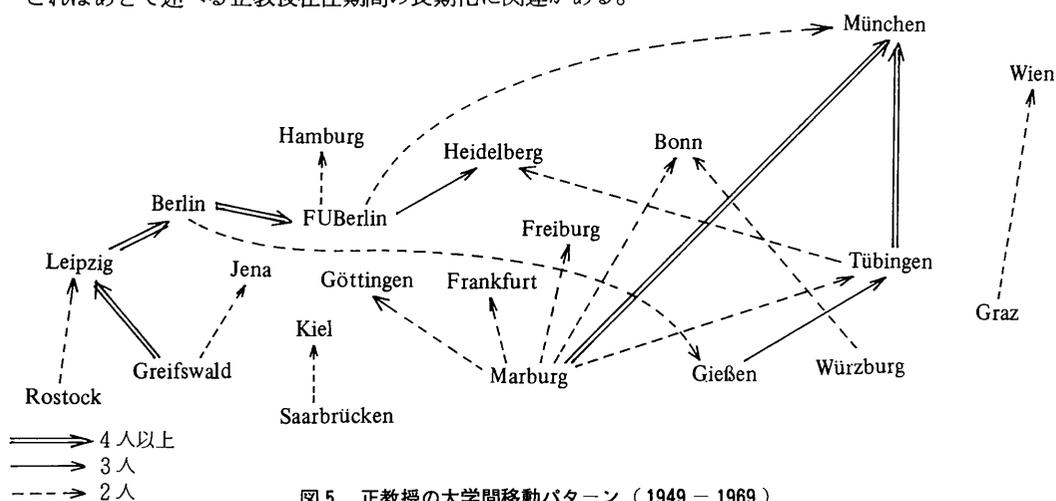


図5 正教授の大学間移動パターン（1949 - 1969）

### 降格移動

いったん正教授になった者がその地位を棄て、他の大学の員外教授や私講師などのより低い地位に移動することは普通考えにくいことである。だが、上山安敏氏が法学（国家学）部について指摘するように、第二帝政下のプロイセンでは、ベルリン大学での再教授資格（Umhabilitation）を申請する者が殺到しており、在職のままベルリン大学で資格を取得するか、それどころか地方大学での自分の地位を鄭でもベルリン大学に来るといふケースが慣行化していた。<sup>10)</sup> 医学部の場合はどうであろうか。オイルナーのリストから、ある大学の正教授がその地位をなげうって他の大学の員外教授や私講師になった事例を判明する限りにおいて調べてみると以下の通りである。順にその氏名、専門、転出前大学（在任期間）、転出先及びその地位を示す。

- Wilhelm Thierry Preyer（生理学） イエナ（1869 - 1888）ベルリン私講師へ
- Stefan Winkle（衛生学） イエナ（1946 - 1949）ハンブルク員外教授へ
- Werner Schultze（皮膚・性病科） ロストック（1952 - 1958）フライブルク員外教授へ
- Alfons Krautwald（Medizinische Klinik）ベルリン（1951 - 1961）フライスブルク員外教授へ

以上の4つの事例のうち、最後の3つは第二次大戦後のできごとであり、それらはいずれも東ドイツの大学から西ドイツの大学への移動であり、政治的な色彩が濃く出ている。最初のものが第二帝政期におけるベルリン大学での再教授資格取得による降格移動の例であると思われる。医学の場合にもわずか一名だがベルリン大学での再教授資格取得をする者がいたのである。

### 移動の頻度

学者の移動を定量的に把握するもう一つの視点は、どの程度の頻度で学者は大学を移動するかということである。近代ドイツの学者社会においては移動は頻繁であったといわれているが、はたしてそれがどの程度のものであったかについては必ずしも定量的に明らかになってはいない。ここでは医学者が一つの大学に何年在任したか、を明らかにすることによってこの問題にアプローチしたい。

具体的には本論の考察範囲である18世紀末より1969年までを原則として10年のスパンで区分し、各期間の正教授あるいは助教授 (außerordentliche Professor) の一大学あたり平均在任期間を地域別あるいは大学別に計算する。ただし、何年間大学に在任したかは、学者がその大学を転出した時点で測定する。また、同一大学内で講座を移動した場合も移動数一回としてカウントしている。同一大学で員外教授や助教授から正教授に昇任した場合、正教授在任期間に加えているものもある。

まずドイツ(1940年代以前は北ドイツ、西南ドイツ、1950年代以降は東ドイツ、西ドイツで区分)の大学正教授の一大学平均在任期間の時系列的変化をみてみよう

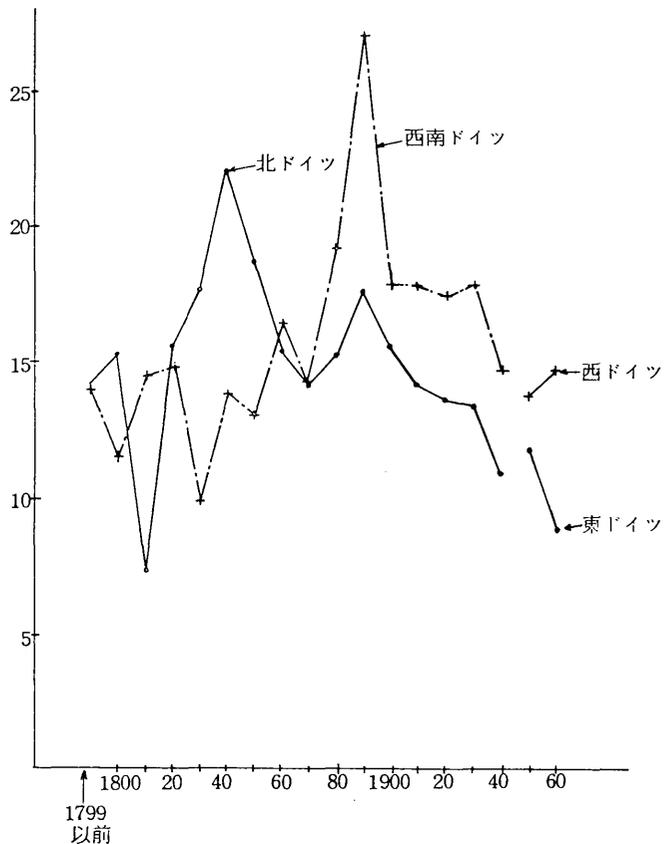
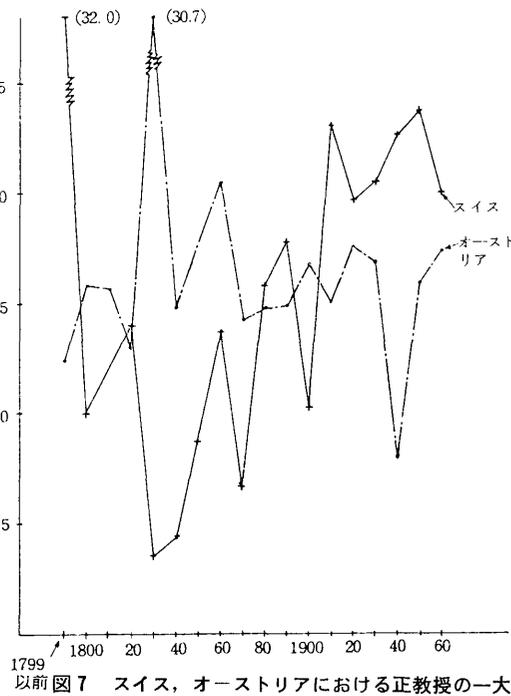


図6 ドイツにおける正教授の一大学在任期間の変化

う。図6がそれである。北ドイツでは1810年代に大きな谷があり（平均在任期間7.3年），その後急速に回復し1840年代にピークを迎え（同22.0年），1870年代に再び谷になり（14.1年），1890年代に第2のピーク（同17.6年）があったあと在任期間は下降の一途をたどっている。2つの谷の時期，1810年代と1870年代はプロイセンの大きな対外戦争と国土の再編成のあった時期である。1806年のイエナにおけるナポレオン軍への敗戦とシュタイン＝ハルデンベルク改革，1813年～15年の解放戦争，1814年のドイツ連邦の成立などを経て領土が目まぐるしく変化し，ベルリン，ボンなどの大学が創立された1810年代前後と，普墺戦争のあとの普仏戦争とストラズブルグ大学の創立があった1870年代は特に社会の変動の多い時期で大学教員の移動がいかに激しかったかを示している。20世紀にはいってからも第一次大戦とフランクフルト，ハンプルク，ケルン，ミュンスター，デュッセルドルフ等の設立やナチス時代の学者の国外流出など学者の移動要因は多い。西南ドイツの大学では19世紀半ばまではほぼ10～15年の在任期間を上下している。ミュンヘン，ベルン，チューリヒなどの医学部設置がこのころあったことも無関係ではなかろう。しかしドイツ統一後は在任期間は長期化して，北ドイツと同じく1890年代から急激に短くなる。東西ドイツへの分裂後は，在任期間は西ドイツで平均14.5年だが，東ドイツでは8.8年と短かく，同国からの頭脳流出の影響を受けている。

オーストリアとスイスは大学数も少なく，従って全体の正教授数も少ないので一人あたり平均在任期間の変動も大きい。オーストリアでは1940年代に平均在任期間は8.1年と特に短くなり，谷ができるが，オイラーのリストをみると1945年に正教授を退任した者が多くなっている。そのほかには極端な谷は見られない。一方，スイスの大学は特異な変化パターンを示している。大局的にみてスイスの大学は19世紀のあいだ在任期間は

長期化する傾向にある。これは20世紀に向かって徐々にドイツの有力大学への招聘待ちの地位から脱却してゆく過程でもある。20世紀になってからは，在任期間が短縮化したドイツの大学とは対照的に，ほとんどの時期で平均在任期間は20年を越えている。特に1920年代以降におけるドイツの大学とは対照が著しい。表2と表3で地域間移動の変化をみてみると，1872-1918年にはスイスの大学からドイツの大学へは総計30名の正教授が移動していたが，スイスからドイツへは7名にすぎなかった。それが1919-1948年になるとスイスからドイツへは総計5名の正教授しか移動しなくなり，逆にドイツからスイスへは8名になっている。このよ



以前 図7 スイス，オーストリアにおける正教授の一大学在任期間

うに20世紀にはいとスイスの大学からドイツの大学へは移動しなくなり、いったんスイスの大学へ赴任した学者は長くそこにとどまるようになったのである。そしてナチス時代移降、この傾向はさらに強まってきている。

次に正教授の在任期間を大学別に分析する。表5は全期間における大学別一人あたり平均在任期間である。在任期間の長い大学にはスイス、西南ドイツの諸大学や、威信の高い北ドイツ、オーストリアの諸大学が多く、逆に短い方にはバルト海沿岸の威信の低いバルト海沿岸の小大学や20世紀になって設立された大学が多い<sup>11)</sup>。最長の大学と最短の大学では2.1倍もの差がある。

表5 大学別の正教授在任期間係数

ベルン	18.9	プラハ	14.7
フライブルグ	18.8	エルランゲン	14.5
ハイデルベルグ	18.6	グラーツ	14.3
バーゼル	18.3	ロストック	13.9
ミュンヘン	17.2	インスブルック	13.7
ゲッチンゲン	17.0	ギーゼン	13.6
キール	16.1	フランクフルト	13.5
ウィーン	16.1	ハレ	13.3
テュービンゲン	16.0	デュッセルドルフ	12.7
ベルリン	15.9	ケーニヒスベルク	12.6
チューリヒ	15.9	ハンブルク	12.5
ボン	15.7	ケルン	12.5
ヴュルツブルク	15.5	マールブルク	11.9
ミュンスター	15.2	マインツ	11.7
ライプチヒ	15.1	グライフスバルト	10.5
ストラスブルク	15.1	ザールブリュッケン	8.1
ブレスラウ	14.8	ベルリン自由	7.0
イエナ	14.8		

学者の在任期間は地位によって異なっているであろう。安定した正教授とそれ以下の者とはかなりの差があるものと想像される。ここではサンプルの関係から、正教授と助教授の平均在任期間を比較してみたい。図8はドイツ語圏の大学全体における、正教授と助教授の一人あたり一大学平均在任期間の時系列的変化である。全期間通して計算すると、正教授は平均14.7年であるが、助教授になると12.5年と短かく、2.2年の開きがある。助教授の在任期間は1910年代までは振動しながらも上昇しつつづけている。19世紀後半以降、ドイツの大学では全体の教員の増加に比べて正教授職の増加は少なく、この結果、教授団の構成はビ

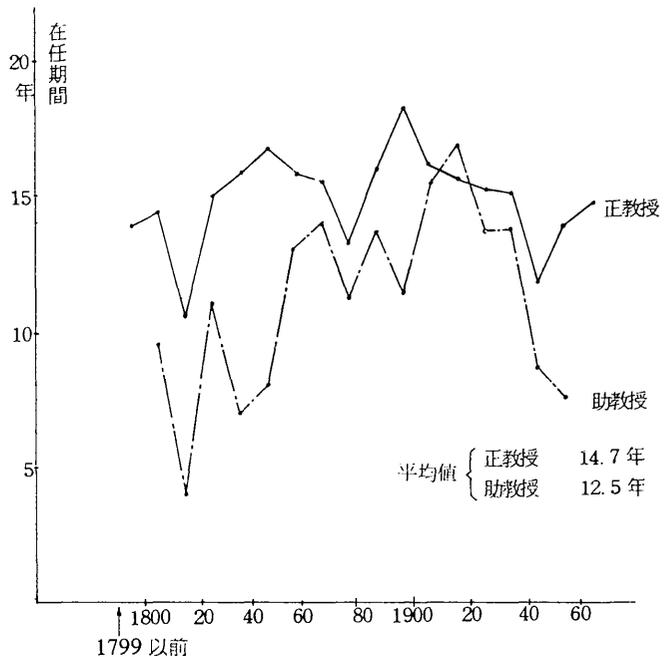


図8 地位別にみた平均在任期間(ドイツ語圏全体)

ラミッド型になると共に中間地位以下の者の昇任はきわめて厳しいものになった。<sup>12)</sup> 助教授の在任期間の長期化にはこのような事情があると考えられる。

### 3. ドイツ語圏における大学の階層構造

正教授の大学間移動を図示してみると一般に移動の方向はケーニヒスベルクやグライフスバルトなどを始点として、ミュンヘンやベルリン、ウィーンへと向かっていた。しかも二つの大学間で相互に行き来している例は少なく、矢印の方向はほとんど一方通行であった。このような結果をみると、個々の大学間にはかなり厳格なヒエラルキーが存在しているように思われる。そこで本節では教員の移動から大学の階層構造を解明することを試み、ドイツ語圏における18世紀末以降、現代に至る期間の大学の階層構造の実態を明らかにしたい。

#### 学者の移動と大学の階層構造

専門職業者としての学者は自らの学問上の達成に対して専門の同僚から何らかの学問上の評価や承認を受ける。学問上の承認には学会や財団などから賞を授与されたり、発見した法則に自己の名前を冠せられたりすることなどがあるが、すぐれた大学に招聘されることもその一つである。<sup>13)</sup> そのような大学は多くの研究費と研究手段をもち、優秀な学生が集まり、研究遂行上有利な条件にある。またそのような大学にポストを獲得すること自体、学界内外で高い尊敬と権力を獲得することでもある。大学側にとっても、有能な学者を集めることは大学の威信の増大をはかる意味で重要なことであり、これは大学制度が競争的であればあるほど死活問題となる。このように学者の世界では学者の大学間移動は報賞体系の一部となっており、学者の大学間移動は報賞の配分＝地位配分をめぐる、大学の階層構造と関連をもっている。

このような観点から学者の移動と大学の階層構造の関係を定式化すれば、「同じ地位の場合、学者は学問上の達成に応じて威信の高い大学に向かって移動する」となる。つまり、一般に同じ正教授という地位であれば学者は威信の高い大学から威信の低い大学へは移動せず、むしろ威信の高い大学では正教授は定年退職あるいは死亡によってアカデミック、キャリアを終わることが多いであろう。逆に威信の低い大学は正教授としての「遍歴」の出発点である。従って正教授のみの移動を考えると、ある大学の威信は  $\frac{\text{転入者数}}{\text{転出者数}}$  で示すことができる。

前節まで正教授の移動パターンを5つの時期に分け、時系列的に分析してきた。ここでは、それにあわせて大学の威信構造の変化を調べてゆくことにする。ただ、時期によっては例えばウィーン大学のように、他大学への転出者数がゼロの大学もあるので、上式を修正した次の式を用い、威信係数が無限大になるのを防ぐことにする。

$$\text{威信係数} = \frac{\text{転入者数}}{(\text{転出者数} + 1)}$$

この式にもいろいろと問題がある。その最大のものは新設大学には転入者が一挙に大量におしよせるため、設定された期間の終わりがら設立された大学では係数の値が実際以上に高くなるということである。<sup>14)</sup> 従って各期間の終わりの年から5年以内に設立された大学についてはその期間の威信係数は計

算しないことにする。<sup>15)</sup>以下、前節までに区分した5つの期間における大学の威信構造を検討してゆく。表6は第二期以降におけるその結果である。

表6 ドイツ語圏における大学の威信係数

1810-1871		1872-1918		1919-1948		1949-1969	
Berlin	16.00	München	17.00	München	11.50	München	19.00
Wien	10.00	Berlin	15.00	Wien	9.00	Bonn	5.50
Göttingen	9.00	Wien	10.67	Berlin	5.40	Heidelberg	5.50
München	3.50	Bonn	2.80	Zürich	2.50	Wien	3.00*
Bonn	1.75	Leipzig	2.80	Tübingen	2.29	Freiburg	2.67
Leipzig	1.50	Heidelberg	2.67	Heidelberg	2.08	Frankfurt	2.50
Heiderberg	1.29	Halle	1.73	Würzburg	1.83	Basel	2.00*
Tübingen	0.80	Freiburg	1.71	Frankfurt	1.50	Hamburg	2.00
Breslau	0.75	Breslau	1.57	Köln	1.40	Göttingen	1.50
Freiburg	0.71	Kiel	1.57	Freiburg	1.36	Düsseldorf	1.00
Jena	0.50	Würzburg	1.33	Münster	1.33	Kiel	1.00
Greifswald	0.43	Göttingen	1.31	Göttingen	1.29	Münster	1.00
Prag	0.38	Strassburg	1.31	Leipzig	1.18	Würzburg	1.00
Würzburg	0.38	Tübingen	1.00	Hamburg	1.14	Berlin	0.90
Giessen	0.33*	Graz	0.88	Bern	1.00*	Leipzig	0.78
Bern	0.25*	Prag	0.64	Bonn	1.00	Tübingen	0.78
Halle	0.25*	Marburg	0.59	Breslau	0.92	Mainz	0.60
Marburg	0.22	Königsberg	0.53	Erlangen	0.86	Halle	0.50
Zürich	0.21	Basel	0.38	Basel	0.71	FUBerlin	0.36
Kiel	0.20	Giessen	0.33	Kiel	0.53	Erlangen	0.33*
Königsberg	0.20	Jena	0.28	Marburg	0.50	Giessen	0.33
Rostock	0.20	Erlangen	0.19	Jena	0.43	Graz	0.33*
Basel	0.00	Zürlich	0.15	Düsseldorf	0.38	Köln	0.33*
Erlangen	0.00*	Bern	0.14	Königsberg	0.38	Jena	0.29
Graz	0.00*	Greifswald	0.13	Graz	0.31	Rostock	0.13
		Innsbruck	0.06	Halle	0.27	Marburg	0.11
		Düsseldorf	0.00	Rostock	0.20	Bern	0.00
		Rostock	0.00	Giessen	0.19	Greifswald	0.00
				Greifswald	0.16	Innsbruck	0.00*
				Innsbruck	0.15	Saarbrücken	0.00
				Prag	0.00	Zürich	0.00

注) \*印は転入・転出の合計が5人未満の大学。

**第一期（～1809）** この期間の移動事例は10に満たず、わずかなサンプルから威信係数を計算するのは意味がないかもしれないが、その数値はハレ3.00、ハイデルベルク2.00、マールブルク、ウィーン1.00、ゲッチングゲン0.50、その他0となる。ベルリン大学設立以前のプロイセンの大学では、ハレ大学はハノーバーのゲッチングゲン大学と並んで他の大学に対する絶対的優越性を示していたといわれる。<sup>16)</sup>この数字もあながち信用できないものでもなさそうである。

**第二期（1810～1871）** ドイツ語圏の二大大国の首都にあるベルリンとウィーンの両大学が、それぞれ16.00、10.00と際立って高く、これに9.00のゲッチングゲンを加えた3大学でトップグループを形成している。これにミュンヘン(3.50)、ボン(1.75)、ライプチヒ(1.50)、ハイデルベルク(1.29)がつづいている。ハレ大学は順位が低下し、全大学中、中低度の位置にある。他方、スイスの大学、ウィーン大学以外のオーストリアやヘッセンの大学、および辺境のバルト海沿岸や東プロイセンの大学の威信係数は低い。これらの大学の中にはベルリン大学よりも古い歴史を誇るものも少なくない。しかし、この時期には図2からも明らかなように、正教授として招聘される最初の大学として、ここを振り出しに他の有力大学に転出するケースが多く、後発の大学よりも地位は下になった。

**第三期（1872～1918）** この時期にはミュンヘン大学の威信係数が急速に上昇し、ベルリン大学、ウィーン大学とともにプロイセン、オーストリア、バイエルンの中心大学として最高の威信を誇っている。従来高い地位にあったゲッチングゲン大学は地位が低下して、ボン、ライプチヒ、ハイデルベルクに次ぐ位置にある。また、スイスやバルト海沿岸、ヘッセンの小都市の大学の位置はこれまでと同じく低い。

**第四期（1919～1948）** この時期もミュンヘン、ウィーン、ベルリンの3大学がトップグループを形成している。しかし、ベルリン大学は社会主義国家誕生を控えて、西ドイツの大学へ転出する学者が多く、威信係数は低くなった。同じように、ライプチヒ、ハレ、ケーニヒスベルクなど東ドイツの大学になる多くの大学やブレスラウ大学の威信係数も低下している。これとは逆に、ナチス期の逃亡先としてスイスに赴く者が多く、スイスの各大学の数値は、いずれも上昇している。また、フランクフルト、ハンブルクのような大都市大学やケルン、ミュンスター両大学は1910年代から1920年代に設立されているが、威信係数は高い方に属している。歴史は新しくても、大都市や先進地域に立地することは大学教員の学問研究の各方面で有利で、他の大学に転出するのをひきとめるだけの魅力をもつのであろう。

**第五期（1949～1969）** ミュンヘン大学は依然として高い数値を保っているが、全体の威信構造は変化した。ベルリン大学(フンボルト大学)からは西ドイツの大学への転出が1950年代も継続し、ウィーン大学では正教授の大学間移動が少ないため、この期間の両大学の威信係数は以前よりも低下し、従来これに次ぐ位置にあったボン、ハイデルベルクと入れ替わっている。ウィーン大学ではオーストリアの大学どうしの移動数自体が減少しているので、数値はみかけの上のものであるようだ。この期間のオーストリアの全大学の教員移動は少なく、転入、転出合わせて6例にすぎない。ベルリン大学以外の東ドイツの諸大学からも西ドイツの大学への移動があるために、ほとんどの大学の威信係数は低下している。

しかし、各国別の単位で大学の順位をみると従来とそれほど変化はない。西ドイツではギーゼン、

マールブルク、エルランゲンを底辺にして、上部にボン、ハイデルベルク、大都市大学のハンブルク、フランクフルトがあり、頂点にミュンヘンがある。東ドイツではベルリン(フンボルト大学)を頂点にしてライプチヒが続き、底辺部にはロストック、グライフスバルトがある。オーストリアではウィーンを頂点にしてグラーツが続き、底辺部にインスブルックがある。スイスでも大同小異、各期間同じ傾向である。なお西ベルリンにあるベルリン自由大学からは他の西ドイツの有力大学に転出する者が多く、威信係数はそれほど高くない。

#### 大学の階層構造の変化と安定性

18世紀末から現代までの威信構造の変化をまとめてみると、全体の期間を通して威信構造に変わらない部分と変化した部分があることに気づく。18世紀末から現在までの威信構造の変遷を整理してみよう。各期間に共通して言えることは、まず、ベルリン、ウィーン、ミュンヘンのように大国の中心にある大学は威信が高く、スイスの諸大学や、ロストック、グライフスバルト、ケーニヒスベルクなどバルト海沿岸の辺境の小都市の大学、ギーゼン、マールブルク、インスブルックなど小都市の大学は威信が低いということである。この両グループの大学の間には、ハイデルベルク、フライブルク、ボン、ライプチヒ、チュービンゲン、ブレスラウ、ヴェルツブルク、ゲッチンゲン、グラーツなどがある。多くの学者はまず威信の低い大学で正教授として最初に着任し、ここを振り出しに他のより威信の高い大学へと移動し、その中のある者はベルリン、ウィーン、ミュンヘンのような大学の正教授としてアカデミック・キャリアを終わるのである。このような正教授の出発点の大学と最後の大学は、どの時期についてもほとんど同じである。また、20世紀に設立された大学でもフランクフルトやハンブルクのように大都市になって設立された大学の中でもフランクフルトやハンブルクのように大都市にある大学はその地の政治、経済、社会上の力を背景にしてその威信は当初から比較的高い。

威信構造全体に大きな変化がみられるのは、政治的な原因によって大学教授の移動があった場合である。また、大都市に大学が設置されたり、ベルリン大学やミュンヘン大学、ストラスブルグ大学のように国家が異常なまでに力を入れた大学が設立された場合には最初から威信係数は高く全体の威信構造および学者の移動パターンにも変化がおきている。

#### 4. まとめと今後の課題

18世紀末より現代に至るまでドイツ語圏においては広い範囲で医学者は大学を移動していた。しかしその移動する範囲はプロイセンとオーストリアの競合、敵対関係を背景にして大きく2つの大きなグループに分けられる。ドイツ語圏南東部ではウィーン大学を中心にグラーツ、インスブルック、プラハの各大学から成るかなり閉鎖的な大学の集団があり、19世紀半ばまではスイスの諸大学も含めて、主にこれらの大学の間を学者は移動していた。この大学の集団は移動の観点からみると閉鎖的な集団で、インスブルック大学を正教授の出発点の大学として、グラーツ大学やプラハ大学を経由して最終的にウィーン大学正教授に至るといった移動パターンをもっている。また大学の階層構造もかなり明確で堅固なものである。19世紀以降、このような移動パターンと階層構造の性格はほとんど変わっていない。ただ、第二次大戦後はオーストリアの3大学間の移動は減少している。

これに比べるとドイツとスイスでは移動パターンと階層構造はやや複雑で変化に富んでいる。プロイセンの対外戦争と大都市大学の新設は学者の移動と大学の階層構造に少なからずインパクトを与えている。特にプロイセンの首都にある大学として1810年に創設されたベルリン大学は最初から高い威信をもち、学者の移動パターンもベルリンを最終駅とする形に変わった。西南ドイツ地域においてはミュンヘン大学もこれにやや遅れてそのような地位になった。20世紀初頭において設立されたフランクフルト、ハンブルクなども程度の差こそあれ、当初よりそのような性格をもっている。しかし、グライフスバルト、ロストック、ケーニヒスベルクなどのバルト海沿岸の小都市大学、およびギーゼン、マールブルク、エルランゲン、19世紀におけるスイスの諸大学はたえず正教授として招聘される最初の大学として、上記の有力大学のほかに、ハイデルベルク、フライブルク、ライプチヒ、ゲッチンゲン、ボンなど有力大学への遍歴の出発点の位置にあった。ハイデルベルク、フライブルク、ライプチヒ、ゲッチンゲンなどの大学はベルリン大学やミュンヘン大学よりは下位にあるが、たえず高い威信を保っていた。ドイツ語圏における正教授の移動状況を見ると、このような全体的流れのほかに、地理的に近い大学どうしの移動は当然のことながら数多く見られる。しかし、ベルリン大学やミュンヘン大学など威信の高い大学へは遠方の大学からも転入してきている者は数多い。北ドイツ地域と西南ドイツ地域の諸大学間にはさほどきわだった人事交流上の障壁ないし断層はみられず、正教授はスイスの諸大学を含めてほぼ全ドイツ的な範囲で各大学を移動していたようである。ただ第一次大戦後、スイスの大学はドイツの有力大学への転出大学としての地位から脱却し始め、そこに正教授は居すわり続けるようになった。ナチスの排他的学術政策の影響がここに看取される。

社会主義国家が成立した第二次大戦後は東ドイツの大学から西ドイツの大学への大量の学者の移動がしばらく続いた。中には正教授の地位を降格してまで来るものもいた。そして概して正教授の移動は各国の国内を範囲とするような傾向が強くなった。大学の階層構造を各国単位で見ると、ほぼ戦前と同じ形であり、正教授としての出発大学と最終到達大学の構造は不変のままである。

さて、全体としてドイツ語圏の大学の階層構造は厳しいものであるのか、あるいはなだらかなものであるのか。この問題はある意味で相対的な問題でありドイツ語圏以外についてのこの種の分析結果を検討し、比較しないと判断できない問題である。しかし、本分析の結果から、あえてこの問いに答えるとすれば、一般に言われているよりはドイツにおいては(オーストリアではそれ以上に)大学の階層構造は平坦なものではないようである。

本論文ではここまでドイツ語圏の35の大学相互の移動を中心に分析してきた。しかし、これらの大学からは特に1930年代を中心にドイツ語圏以外の大学への移動も少なからず存在する。これはドイツからの頭脳流出の問題にも関連する重要な問題で、ドイツ語文化圏の他の地域への学術の影響の問題とあわせて今後の研究課題としたい。また、本論における移動分析は現象の記述に止まっている。学者の移動の背後にある学派や大学教授市場の分析を行なうことを通してその動因を明らかにする必要がある。大学の階層構造についても移動分析から導いた威信指数の妥当性をさまざまな角度から検討するとともに、ドイツ以外の国々についてもこのような分析を行ない比較することが必要であろう。





## 〔注〕

- 1) Ben-David, J., "Universities and Academic System in Modern Societies", Kaplan, N. (ed.), *Science and Society*, Arno Press, 1975, p. 67 (新堀通也編訳『科学と教育』, 福村出版, 1969年, p.61) 中山茂『歴史としての学問』, 中央公論社, 1974年, p.165~166.
- 2) ベン=デービッド, 新堀通也編訳, 上掲書, p.61.
- 3) サロモン・ウォルド「大学」, DECD編 村井仁訳『イノベーション 技術革新成功の諸条件』, 通商産業調査会, 1974年, P.145.
- 4) Eulner, Hans-Heinz, "Die Entwicklung der medizinischen Spezialfächer an den Universitäten des deutschen Sprachgebietes, Ferdinand Enke Verlag, 1970.
- 5) 35の大学は次の通りである。なお1945年までのデータしか記載されていない大学は\*印で示した大学である。  
ベルリン, ベルリン自由, ボン, プレスラウ\*, デュッセルドルフ, エルランゲン, フランクフルト, フライブルク, キーセン, ゲッチンゲン, グライフスバルト, ハレ, ハンブルク, ハイデルブルク, イエナ, キール, ケルン, ケーニヒスベルク\*, ライプチヒ, マインツ, マールブルク, ミュンヘン, ミュンスター, ロストック, ザールブリュッケン, ストラスブルク(1872-1918), テュービンゲン, ヴュルツブルク, バーゼル, ベルン, チューリヒ, グラーツ, インスブルック, ウィーン, プラハ\*。なお1960年代に設立された大学や途中で消滅した大学, ベルリン軍医学校などの非大学は記載されていない。
- 6) 医学の下位分野は次のように17に区分されている。解剖学, 眼科学, 外科学, 産科および婦人科学, 法医学, 耳鼻咽喉科学, 皮膚性病科学, 衛生学, 小児科学, 臨床医学(Medizinische Klinik), 外来臨床医学(Medizinische Poliklinik), 病理解剖学, 薬理学, 生理学, 生理化学, 神経精神科学, 歯学。
- 7) personally Ordarius も含めたが, Title Ordarius は除いた。
- 8) 各地域に含まれる大学は次の通りである。
  - ・北ドイツ(ベルリン, ボン, プレスラウ, キーセン, ゲッチンゲン, グライフスバルト, ハレ, イエナ, キール, ケーニヒスベルク, ライプチヒ, マールブルク, ロストック, ストラスブルク, フランクフルト)
  - ・西南ドイツ(エルランゲン, ミュンヘン, ヴュルツブルク, フライブルク, ハイデルベルク, テュービンゲン)
  - ・オーストリア(グラーツ, インスブルック, ウィーン)
  - ・スイス(バーゼル, ベルン, チューリヒ)
- 9) ジャック ヴェルジェ, 大高嶺雄訳『中世の大学』, みすず書房, 1979年, p.85.
- 10) 上山安敏『ウェーバーとその社会』, ミネルヴァ書房, 1978年, p.69~70.
- 11) ちなみに, あとで定義する大学の威信係数と正教授在任期間の相関係数を計算すると, 0.28となった(18世紀~1969について)。両者の間には密接な関連はみられない。(5%水準で検定)
- 12) 例えば上山安敏『ウェーバーとその社会』p.18. や Goldschmidt: D., Die gegenwertige Problematik, in; Plessner, H. (hrsg.) *Untersuchungen zur Lage der deutschen Hochschullehrer*, Band I, Vandenhoeck & Ruprecht, 1956, p. 48
- 13) Cole, S. & Cole, J., *Social Stratification in Science*, Univ. of Chicago Press, pp. 46-60.
- 14) 例えば1914年に設立されたフランクフルト大学の第3期(1872-1918)における威信指数は4.00になる。なお, 学者の移動のデータから大学の威信を測定する試みは既にA. ツロクツォーフによさなされている。(Zloczower, A., *Konjunktur in der Forschung* (original title; *Carrer Opportunities and the Growth of Scientific Discovery in the 19th Century Germany*, in; Pfetsch F. & Zloczower, A.), *Innovation und Widerstand in der Wissenschaft*, Bertelsmann Universitätsverlag, 1973) ここでは威信係数は, (地位変化なしの転入者数+昇任による転出者数)/(昇任による転入者数+地位変化なしの転出者数)で測定されている。この式も上述の欠点をもっているが, 昇任による移動も考慮に入れている点でより優れている。ただ彼の研究では, 扱ったサンプルが569と本論のデータより少なく, 19世紀全体についての威信係数だけを計算しており, その歴史的变化については言及していない。
- 15) 除外したものは第2期(1810-1871)でインスブルック(1869年), 第3期(1872-1918)でフランクフルト(1914年), 第4期(1919-1948)でマインツ(1948年)である。
- 16) 平野一郎「ドイツ大学の変容」, 梅根悟監修, *世界教育史大系26『大学史I』* p.115-119.

Hierarchy Structure and Mobility of Professors  
among Universities in German-speaking World  
– Case of Medicine since the late 18th Century

Hirotoshi Yamasaki\*

The purpose of this paper is to investigate the mobility of university professors among institutions and the prestige structure of university system in German-speaking world from the late 18th century to present. A 35×35 input-output matrix was made from the data on medical professors listed by H. Eulner.

Using this data matrix, a mobility and prestige structure was examined historically. Division of the period is as follows;

the first period ( -1809)	the second period (1810-1871)
the third period (1872-1918)	the fourth period (1919-1948)
the fifth period (1949-1969)	

The prestige index of each university is defined as follows;

$$P. I. = \frac{\text{the number of full-professors who moved in}}{\text{the number of full-professors who moved out} + 1}$$

The most prestigious universities were Halle in the first period, Berlin, Göttingen and Wien in the second period, Berlin, München and Wien in the third period. During these periods, less prestigious universities were the small universities which were located in small cities or peripheral regions, such as Rostock, Königsberg, Greifswald, Giessen, Erlangen, Innsbruck and Swiss universities. In the fourth period, the prestige of universities in Deutsche Demokratik Republik after World War II, including Berlin, decreased and that of Swiss universities increased. The most prestigious universities were München, Berlin, and Wien. In the fifth period, the prestige structure was almost the same as in the fourth period in each country.

Medical professors were moving across wide regions in German-speaking world in the period extending from the late 18th century to before the Second World War. But the range of mobility was mainly divided into two groups.

In the south-east of the German-speaking world, there was a closed mobility group which was composed of Wien, Graz, Prag and Innsbruck (including Swiss universities until the late 19th century). In this group, many-professors were moving from Innsbruck, which was the starting point of full-professors' mobility, via Graz or Prag to Wien. The hierarchy structure was distinct and rigid. These characteristics were almost unchangeable. Unlike in the past, mobility among institutions has diminished since World War II.

In Germany and Switzerland, mobility and prestige structure were more complicated and changeable than in Austria. Prussia's intercountry wars and establishment of large-city universities gave impact to the mobility pattern and prestige structure. Berlin University, which was founded in 1810, received high prestige from the beginning, and changed the mobility pattern so that it was the final destination of the mo-

---

\* Research Assistant, R. I. H. E.

bility patterns of professors. From Berlin few professors moved to other universities. Munchen, Frankfurt, Hamburg are the same case to some degree. Beside these universities, Heidelberg, Freiburg, Leipzig, Göttingen, Bonn have been continuously high status. But small universities such as Greifswald, Königsberg, Rostock, which were located in Baltic coast, and the Swiss universities, Erlangen Giessen and Marburg were the starting point of professors' mobility during the nineteenth century. From the chairs of these universities the mobility of full-professors started toward more prestigious universities.

In Germany, mobility patterns show a little regional bias, but professors in prestigious universities were appointed from over all regions. Clear gaps cannot be found between Prussian and South-west German universities, including Swiss universities until before the second World War. Many Swiss universities did not finish the early stages of mobility until after World War I, but later, professors remained in Swiss universities because of the Nazi's exclusive academic policy.

For several years after the founding of the German Democratic Republic in 1948, there was a large flow of professors to German Federal Republic. Except for this case, mobility across countries has diminished but the prestige structure of universities in each country is almost the same.